

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21402043

研究課題名(和文) 日本人大学生がアメリカの大学で成功するための社会文化要因

研究課題名(英文) Academic Literacy Acquisition by Japanese Students in American Universities

研究代表者

Hood Michael (Hood, Michael)

日本大学・商学部・准教授

研究者番号：90349928

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,600,000円、(間接経費) 1,680,000円

研究成果の概要(和文)：調査結果は、大学院生と学部学生間に大幅な差異が認められた。大学院生の場合、3つのテーマが浮上した：参加の形式、相互作用のパターン、および機関資源を活用。しかし、これらのテーマのすべてがあまりにも定量的方法によって説明されるように位置していたコンテキスト上の変数と交差であった。コンテキスト上の変数は、リテラシーの要求、制度的支援、および個々の性格の違いを含んでいる。学問的成功は、学術的、社会的、制度支援に関連していた。学部生の場合、別の画像が出現した。彼らは他の日本人学習者のネットワークに参加することは遥かに高かった。戦略的にクラスを選択し、教授と割当や参加の条件を交渉する。

研究成果の概要(英文)：Findings were significantly different for graduate and undergraduate students. Three dominant themes emerged for graduate students: Forms of Participation, Patterns of Interaction, and Leveraging Institutional Resources. However, all of themes intersected with contextual variables, including the quantity of literacy demands required by different majors, institutional support, and individual personality differences, and ability to leverage socio-academic support networks to make up for gaps in knowledge and ability. Academic success was related not to English proficiency, intelligence, or effort. For undergraduates, a different picture emerged. Most belonged to local Japanese student organizations, and very active. In addition, undergraduates chose classes that required less literacy demands early in their studies. They also negotiated the terms of assignments and participation with professors.

研究分野：社会科学D

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：社会学 言語学 ナラティブ ケーススタディ スタディーソーシャルネットワーク

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の初期段階では以下のプロセスを踏まえていた：資格のある研究の参加者を募集し、インフォームドコンセントを得て、最初のキャンパス訪問を行い、参加者の権利と責任について事前のインタビューを実施した。研究の1年目に、大学院生3人と学部生2人を募集することができた。

(2) データ収集と分析は、補助金の5年間を通じて継続的であった。研究の最初の3年間では参加者を募集し続けた。最後に、合計17のケーススタディ(8人の大学院生、6人の学部生、および学位を準備するために英語の集中プログラムを学習していた3人)を対象に実施することができた。スレは非常に低かった。1人だけが最低2年間のデータ提供する前に研究から撤退した。データ収集と分析は、補助金の四年を通して続いた。五年目では最終的な分析の手續や原稿の準備に専念した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の主な目的は、より良い第二言語の学術社会化と高度なリテラシー獲得の過程を理解するために、大学院と学部の両方のレベルで、米国の高等教育機関における日本人学習者が生きた経験を文書化し、分析することである。米国の高等教育機関では日本人学生の卒業率が他の国々からの学生より劣っている傾向が見られるため、本研究は重要である。

(2) 米国では、様々な学術的なコンテキストで勉強している多様なグループの日本人学生の経験を理解し、海外留学するための日本人学生を対象により有効な準備方法を開発することが目的である。と同時に、米国の高等教育機関で、日本人の学習者を支援・育成するより良い方法を見つけるために本調査結果を使用する場合がある。

3. 研究の方法

(1) 最も広い意味では、不変の法則によって拘束されていない、流体であるプロセス(静的であり、定量的方法や統計学的手法によって測定することができる)や慣行を区別する構成主義研究パラダイムから派生し、質的研究法を適用し、時間の経過とともに変更されることがある。本研究は、学習は基本的に学術的地位や認識を達成することで社会資本を達成するために努力し、人々の共同体の中で行われ社会的実践であることを前提に設立された。

(2) 構成主義パラダイムをもとに、研究参加者の生きた経験を理解する物語のアプローチを採用する。要するに、彼らの物語を記録した文脈の要因を考慮して、それらを解釈、重要なレンズを通して彼らの物語を書き直

した。プライマリデータは年間に最低二回の対面インタビュー及び毎月の Skype のインタビューを行い、参加者の日記や観察ジャーナルは研究の過程を通じて維持していた。

(3) すべての face-to-face や Skype のインタビューは、シングルスペースのテキスト 5000 ページ以上を転写した。参加者のジャーナルが 500 ページ以上に達し、かつ各参加者のために別々のフィールド・ジャーナルが維持された。すべてのデータがテーマ別に反復プロセス(繰り返し方法)にて分析した。データの種々の形態は、知見の妥当性と信頼性を支持するために、電子メールを介してフォローアップ質問と共に、多様化(様々な角度から分析)の手段として使用した。

4. 研究成果

(1) 大学院生の経験と学部生の間に大幅な差が見られた。大学院生の経験のテーマ別の分析では、3 つ支配的なテーマを明らかであった。

(2) テーマ 1: 参加の形態である。大学院生は、学術的リテラシーを取得し、自分の能力を表示する手段として、地元の学術コミュニティに参加する必要があった。しかし、参加の条件は、各コース、各学部、各機関によって異なる。最も成功した日本人の大学院生が自分自身を主張し、参加のために文化的、言語的な障壁を克服し、そのインストラクターから受け入れを得るために、L2(英語は第二国語である)のアイデンティティを活用することができた。しかし、自己主張が強い参加者であっても、L2 の学生を受け入れることを拒否し、L1(英語は母語である)のピアと同一の基準にする教授に直面したときは、ほとんどが苦労した。この意味で、教室のコミュニティに参加する能力は、多くの場合はスキルではなく運に依存していた。

(3) テーマ 2: 相互作用のパターン。学習が共同参加型実践であるという前提に基づいて、研究参加者は地元の学術コミュニティ: コミュニティの中心である彼らのアドバイザー、教授から、コミュニティの周囲である彼らと同期にスタートした L1 及び L2 のピアまで、相互作用する方法を調査した。調査結果は以下のことを示唆している: 学術コミュニティ内で強力な社会的なネットワークを開発し活用した学習者が、自分の知識のギャップを埋めるために、成功するために必要な助けを得るために、他の人と効果的に相互作用することができた。このようなネットワークを形成することができなかった参加者が多くの場合は成功に苦労した。

(4) テーマ 3: 機関レベルでの資源を活用。学部および機関のサポートは、ベストの状態では一貫性のない、最悪の場合は存在もしな

かった。L2 大学院生にとっては、最も重要な制度的資源の一つは、ライティングセンターであり、ライティングチューターは、参加者によって作成される文章の質の向上を目指して参加者を従事した。

(5) しかし、いくつかの問題が浮上した。まず、ライティングセンターは人員不足であり、参加するために、3 週間前に事前にアポイントメントしなければならなかった。このリソースは非実践的で行われる。第二に、セッションはわずか 30 分であった。ライティングの能力を著しい効果を作るために十分な時間ではない。第三に、チューターは(通常は L1 の学部生)、参加者のアイデアをクリティカルな応答を可能にするためにジャンルの知識を持っていなかった。また、L2 の学生のためのライティングセンターのリソースは需要に満たしていなかった。多くの場合、各キャンパスに数千の L2 学生のニーズを満たすために、1 人パートタイムの L2 専門家が配置されている。最も成功した学習者は、他のチューターや、編集者、校正者の支援を補完しながら、ライティングセンターを最大限に活用した。

(6) 個人の性格の違い。分析から、3 つのテーマに加えて、個々の性格の違いは、コミュニティに参加したり、他のユーザーと対話したり、制度的資源を活用する参加者の能力に重要な役割を果たしたことを明らかにした。

(7) 学部生の経験は、大学院生の経験とは大きく異なり、2 つの支配的なテーマが上浮した。

(8) 言語的・文化的背景の様々な L2 ピアの支持に依存した大学院生とは異なり、学部生はキャンパス内の他の日本人学習者のサポートに大きく依存し、自分の L1 を共有するアフィニティグループを探し出した。キャンパスの日本学生協会への参加は、学部生のために、感情的、社会的、実用的、学術的支援の重要な情報源であることが判明した。アクティブなソーシャルネットワークに従事した大学院生と同様に、学部生はほとんどが栄えた。他人から自分を隔離する者は、英語力、努力、または知性に関係なく、成功するために苦労した。

(9) 成功した学部生は、非常に戦略的にコースを選択した。研究参加者の学部生のほとんどは、学習の最初の日程に、言語理解とプロダクションのレベルに関連して、必要されるであろうというコースを選択した。多くの参加者は、自らの専攻でハイステークのコースを取る前に、言語能力を開発するための時間を与えるために、認知言語学の欠点を最小限に抑えるための手段として、早期に体育や音楽のコースだけでなく、一般的な教育コース

を取った。さらに、一部の研究参加者は、これまで高い言語を必要条件とする専攻(例えば、文学や歴史)から、より低い言語能力を必要とする専攻(例えば、数学や観光)へ変更するようになってきた。

(10) 研究の長手方向の性質は、データ収集と分析期間中に公表することは非現実であった。また、インタビューのデータやジャーナルを分析するのにかかる時間の長さを過小評価していた。研究の 5 年目の大半では、本の長さの研究の原稿を書くことを過ごした。この作業は進行中である。2014 / 2015 年度の間、以下の図書や論文を公開することを期待する。

〔図書〕

「Participating in the Margins: Japanese Students in American Universities」(これまでに 400 以上の原稿ページを書き上げている、現在は出版社を探しています)。

「If You Want to Study in America: A Guidebook for Japanese Students」(開発段階である)。

〔論文〕

「Identity and the Japanese Graduate Student in American Universities」

「Socio-academic Relationships in Graduate School: The Japanese Experience in American Universities」

「Power and Agency in American Universities: The Experiences of Japanese Learners」

5 . 主な発表論文等

次のように私は、世界中の学術会議で暫定的な中間の調査結果を発表しました。

〔学会発表〕(計 9 件)

Hood, M. (9 May 2014).

Second Language Academic Socialization: Participatory Practices in U.S. Universities.

Argentina TESOL, Jujuy, Argentina.

Hood, M. (25 October 2013)

Participating in the Margins: Academic Socialization of L2 Graduate Students in US Universities.

Georgia TESOL Conference. Atlanta, USA.

Hood, M. (22 March 2013)

Learning to Participate: Japanese Students in US Universities (interim report).

International TESOL Conference. Dallas, USA.

Hood, M. (23 February 2013)

Learning to Participate, Participating to

Learn: Gaining Access to Academic Discourse Communities.

Cambodia TESOL Conference. Phnom Penh, Cambodia.

Hood, M. (14 October 2012)

Learning to Participate.

38th Annual JALT International Conference. Hamamatsu, Shizuoka.

Hood, M. (16 October 2011)

Raising Voices, Crossing Boundaries: Japanese Students in American Universities (progress report).

Japan Intercultural Institute Annual Conference. Tokyo.

Hood, M. (16 October 2010)

Raising Voices, Crossing Boundaries: Japanese Students in American Universities. Korea TESOL Conference. Seoul.

Hood, M. (30 January 2010)

Narrating Success: Identity, Agency, and Negotiated Participation in American Universities.

Thai TESOL Conference. Bangkok.

Hood, M. (19 September 2009)

Japanese Graduate Students in American Universities: Gaining Access to Discourse Communities.

Southeast TESOL Conference. Atlanta.

最後に、2014年の8月にブリスベン、オーストラリアのAILA世界大会で研究成果を総合的にプレゼンテーション発表する予定である。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

フッド マイケル (HOOD, Michael)

日本大学・商学部・准教授

研究者番号：90349928